

尾瀬ネットワーク通信

2001年10月31日 VOL.4, No.4(11) 尾瀬自然保護指導員ネットワーク

(尾瀬のハイキングコースなどを質問する人も多かった)



九月二十九（土）、三十（日）の両日、埼玉県の児玉町総合文化会館「セルデ

自然文化フェスティバル in 「だま」 ♪ ネットワークも初の展示 ♪

この催しは埼玉県の「彩の国県民芸術文化祭2001」の一環として実施されたもので、地元の自然保護団体やカメラクラブ・絵画クラブ・山野草会などが自然をテーマにした展示に工夫を凝らし、そば打ちや竹籠作りなどの体験コーナーも人気を集めていた。

ネットワークの展示のきっかけとなつたのは、当会幹事の永島勲さん。五年前に埼玉県北西部の児玉町の住民となつた永島さんは、

「で、「自然文化フェスティバル in こだま」が開催され、尾瀬自然保護指導員ネットワークも、記念すべき初のデモとして写真やVTR、ポスターやパネル解説などによる特別展「尾瀬の自然展」で展示に参加した。

永島さんは尾瀬の写真を作成や片品村の「一仙」さんとの協力を得て尾瀬のパンフレット類を集めなど、懇親の合間を縫つてこつこつ準備を進めてきた。

のと思われる。

最後に、ご協力を頂いた

（尾瀬のVTRを見る人たち）



（高橋喬）

ネットワークの展示の説明を求める人、尾瀬のコースを尋ねる人なども多かった。わずか二日間であったが、尾瀬の自然保護への理解が確実に高まつたものには、会場に張りついたネットワークの田中志朗さん・山本誠剛さん、そして内助の功の大きかつた永島夫人にお礼を申し上げたい。

尾瀬ヶ原にシカを探す

第一回野生ジカ調査報告

■山ノ鼻に集合

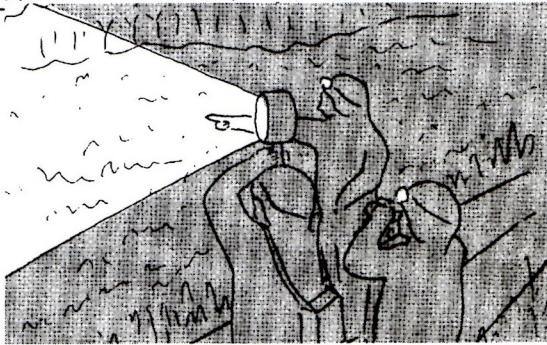
九月十五日、山ノ鼻の尾瀬ロッジには、代表をはじめ十一名の尾瀬ネットのメンバーが集まりました。

■シカを発見！
消灯後の静まつた小屋を抜け出し、九時に前庭に集合。レインウェアにヘッドランプの身仕度で、さあ出発です。

■シカを発見!

夕食後のミーティングで教授から、尾瀬の野生ジカの現状・具体的な調査方法について説明を受けました。この冬、群馬・栃木両県で約四千頭が狩猟の対象となり、その影響か、尾瀬ケ原のシカが昨年より増加している様子はないとのことでした。

ホツとはしたものの、狩猟頭数の多さには思わずたまに息が漏れました。



(野生ジカの調査風景
スケッチ・坂本敏子)

調査報告 | 雨があがつたばかりで濡れている木道は、足に一瞬の油断も許してはくれません。雲に被われ月も星も見えず、湿原では、ヘッドランプの作るうす黄色のまるい輪だけが頼りです。

主な調査器具は、一灯のビームライトと約七キログラムはあるというバントリーラムに磁石や双眼鏡が付きます。一回ライトを照射すると、その光りの到着限界近くまで進み、再び照射します。ライトの光にシカの目が反射すること、存在を確認し、記録してゆくのです。

「あつ、いたいた。」の声に、全員が光の先を見詰めます。白銀に明るく輝く目が二つ、四つ・・・母親と子供のようで、驚いた

ビームライトに照らし出される湿原や林縁に目を凝らしながら、下田代十字路を左折し東電小屋をまわった一行は、牛首で一休み。雲の切れ間からまたたく星を眺めて、疲れた足を休めました。

今晚の確認は十一頭。山ノ鼻への到着は二時すぎとなりました。

■調査が終わって

今回参加された方々にはこの紙面よりお礼を申し上げます。

終了後、いくつかの感想や反省事項が寄せられましたので、ここに紹介します。

- ・大変な調査だが、やりがいがあつておもしろいと思った。自分の照らしたライトで親子のシカを発見てきて、ラツキーだつ

ように跳ねながら移動してゆきます。

「方向は北東、一〇〇メートル、林縁」記録者は急いでペンを走らせます。

調査が終わつて

今晚の確認は十一頭。山ノ鼻への到着は二時すぎとなりました。

- ・ シカの生態などについて、少しでも楽にする工夫が必要。
学ぶ機会がほしい。

・バッテリーが重く、片肩掛けでは疲労する。ザックに入れて背負うなど、

- ・歩調が早すぎた。
- ・歩く距離が長すぎた。
- ・回数は年二回が適当では

次回、山ノ鼻に集まるのは、これから降り積もる至仏山の雪が、消える頃でしょうか。

担当幹事
坂本敏子

◆第一回尾瀬自然保護指導員

養成講座を終えて◆

なられた皆様の今後の活躍
を大いに期待しております。

(担当幹事 磯部義孝)
(永島勲)

今回の指導員養成講座の開講にあたり、会員各位に多大なご協力を頂き、深く感謝申し上げます。山岳雑誌「山と渓谷」及び「岳人」が掲載されると、多くの方から事務局に問い合わせを頂き、最終的に五名の受講生の参加を得ることが出来ました。

四日間とも天候に恵まれ、夕食後の室内研修やアヤメ平・尾瀬ヶ原・尾瀬沼等、長時間の実地研修など、極めてハードなスケジュールにもかかわらず、受講生には真剣かつ熱心に勉強をして頂きました。高橋代表は三日目から合流し、講師として種々のお話を頂きまし

た。また、桧枝岐村では元村長の星一広様に、村の歴史や文化に関するご講演と史跡のご案内をして頂きました。厳

しい自然の中で暮らしてきた村の様子を学ぶことが出来ました。星様をはじめ宿舎の一仙さん・わたすげ荘さんは紙面を借りて厚く御礼申し上げます。

この講座では、尾瀬の自然や尾瀬の自然保護に関する基礎の基礎を学んだに過ぎません。これを契機に、各受講生がネットワークの実践活動等を通じて積極的に自己啓発に努めることにより、先輩会員と同様に立派な尾瀬自然保護指導員になっていくものと確信しています。

既に五名全員が入会し、九月のニホンジカ調査や十月の入山者指導に参加しバス添乗解説などの活動が行われました。受講生五名の入会により組織の活性化に繋がるものとして大変心強く思つております。新しく尾瀬自然保護指導員と

しい自然の中で暮らしてきた村の様子を学ぶことが出来ました。星様をはじめ宿舎の一仙さん・わたすげ荘さんは紙面を借りて厚く御礼申し上げます。

既に五名全員が入会し、九月のニホンジカ調査や十月の入山者指導に参加しバス添乗解説などの活動が行われました。受講生五名の入会により組織の活性化に繋がるものとして大変心強く思つております。新しく尾瀬自然保護指導員と

途についたところです。向いの席では島上氏がリラックスしています。思えば今クスしていません。思えば今号を手にしたのが、この講座との出会いでした。尾瀬は下の娘が不登校をしていました頃に初めて行き、心が癒され立ち直ることができた忘れる事のできない所です。そんな尾瀬を美しい今まで後世に残すのは、今を生きている私達の責務とばかり高い志を持つて参考したのです。

それにしても、先輩諸氏の知識の豊富さにはただただ脱帽！こんな私でも、何だか頭が良くなつたような気がした三日間でした。



(受講生と磯部講師
富士見湿原にて)

尾瀬自然保護
指導員となつて

大橋文江
二ヶ月、私は今、桧枝岐村
御池の入山者指導を終え帰

九月のニホンジカ調査時には、本当にいるんだろうか？という思いでしたが十一頭もいて、挙句に雄鹿の“おたけび”まで聞くことができて驚きです。真っ暗な尾瀬ヶ原の真中で見たあの星☆☆は感動でした。

そして、今回の入山者指導。二度先輩と会津バスに同乗して学んだ後、実践デビューライド！見ているのと実

際に行うのでは大違い。沼山峠までの二十分が一時間で北千住、またコンクリートジャングルの中に戻ります。

(十月八日、会津高原駅二時四十八分発の快速車中にて)

指導員養成講座を
受講して

安部晃樹

私は尾瀬を愛して四十三年、尾瀬には五十回以上の山旅を続けています。山旅を重ねるうちに、アヤメ平、至仏山のオヤマ沢田代・高天ヶ原一帯の荒廃が目に付いてきました。一時、「至仏山頂」山の鼻間のコースが登山禁止になつて安心していましたところ、五年前に解除され、また荒れ始めてい

ると言う。以前から尾瀬の自然への関心があり、気になつていました。

今回の受講は、永年愛読している「山と渓谷」の受講生募集の記事をみて申し込みました。八月二十三日から三泊四日の講座では、各講師の尾瀬に対する愛情が、一言一言私の胸に伝わつてきました。また、檜枝岐村の元村長「星さん」の尾瀬や桧枝岐に関する話を聞くことが出来とても参考になりました。尾瀬も白神山地も山を愛

する者としては、自然を大切にして子や孫のために後々まで残してやりたいと思ひます。それには私たち

指導員だけでは保存は困難です。やはり国の力、特に環境省の更なるバックアップが必要だと思います。

尾瀬の自然を後世に引き継ぐためには、尾瀬に来る人は自然を理解し、尾瀬を愛する人だけが入山するのが一番良いのですが、旅行会社も十分な理解が必要です。ただ、儲け主義だけで人を連れてくるので

は、尾瀬の自然に悪影響を与える結果となります。旅行会社の社員にも自然保護の指導が必要です。また、中学校・高校では入山前に生徒や教員に対する指導教育も大切です。

平成十三年度「指導員養成講座」の受講生
安部晃樹（東京都）
太田繁三（宮城県）
大橋文江（東京都）
棚橋収（埼玉県）
古内公雄（宮城県）

▼▼アヤメ平
近況報告▲▲

研修以来のアヤメ平行き

は群馬県側第一回入山指導第三日目、二〇〇一年七月十五日、深山・山本両名により実現した。

昨夜の雨も上がり、早朝から快晴の中、鳩待峠六時四十五分出発、雨上がりの木道は滑りやすい。小鳥のサエズリがとても爽やかな気持とアヤメ平湿原状態がどうなつたか不安とが交差する中、余りにも入山者が少ない日曜日、静かな登りを横田代についてほつと

高地のアヤメ平は何時になど裸地化のまま、如何に緑の回復がむずかしい作業で知らぬいでアヤメ平に来てが戻りつつある湿原のアヤメ平を楽しんだ。